

藤井倫明著

『瓜子姫の死と生 原初から現代まで』

立石 展大

アンケートの概要と結果・先行研究での昔話に関するアンケート

第二章

近代以前の文字に残る「瓜子姫」御伽草子『瓜姫物語』・柳亭種彦『昔話きちちゃんんとん』・学者たちによる「瓜子姫」

第二章

要素別の起源と「瓜子姫」の地域差

第三章

近代以降の児童向け「瓜子姫」児童向け「瓜子姫」の流れ・挿絵に見る瓜子姫・高野辰之の作品・楠山正雄の作品・柳田国男の作品・関敬吾の作品・坪田譲治の作品・松谷みよ子の作品・寺村輝夫の作品・木下順二の作品・アンソロジー作品集

「瓜子姫」を構成する要素・姫の生死・姫の誕生・外敵の末路と血・木・真相の発覚・機織と嫁入り・イモ・珍しい要素・地域別での型の分類・伝播と変容の考察

本書は、藤井倫明氏の博士論文を基に出版された研究書である。四三二頁に及ぶ大著で、全て「瓜子姫」に関する内容である。内容は二部構成となっており、第一部は口承文芸を中心に分析され、第二部は再話を中心に考察されている。最初に、その目次を確認していく。

第一部 口承文芸としての「瓜子姫」  
第一章 「瓜子姫の誕生」

第三章

瓜子姫と関わる他の昔話との比較

第四章

忘れられた「瓜子姫」

序論  
第一部 口承文芸としての「瓜子姫」  
第一章 「瓜子姫の誕生」

五大昔話との比較・「天道さん金の鎖」との比較・小鳥前生譚との比較

石井研堂の作品・藤澤衛彦の作品・浜田広介の作品・平林英子の作品

「瓜子姫」に関する先行研究・海外説話との比較から考察する

第二章

リライトされた「瓜子姫」アンケート結果に見る現代の瓜子姫への認識

補遺 「瓜子姫」を題材とした小説・漫画

「瓜子姫」の起源・アマノジャクの軌跡

再構成作品の定義・「瓜子姫」

おわりにかえて

まず「第一部 口承文芸としての『瓜子姫』」から見ていく。ここでは、先行研究と、自身が昔話資料集から収集・分析した全国の「瓜子姫」とをつき合わせて、より妥当性がある結論を導くという研究方法で進められている。

この第一部において、藤井氏は主に柳田國男「桃太郎の誕生」・関敬吾「ヨーロッパ昔話の受容」・日本昔話の社会性に関する研究」・猪野史子「瓜子姫の民話と焼畑農耕文化」などに所載の「瓜子姫」に関する先行研究を始めに紹介した後、論を組み立てている。これら三氏の研究が、後の瓜子姫研究に大きな影響を与えているためである。

まず、柳田説を次のようにまとめている。  
(二二頁・二三頁)

A 瓜子姫は水の流れによって清き所より運ばれてくる申し子であった。また、瓜は桃よりも古くから神聖なも

のとして扱われており、「桃太郎」の桃よりも古い要素である可能性が高い。

B 瓜子姫は神の子＝申し子であった。

C 瓜子姫の事業は神の衣を織りなすことであり、完成ののちには神の妻となる。日本古来の忌籠りの風習に通じる。

D アマノジャクは姫の事業を妨害する敵であるが、最初から負けることが確定している敵である。姫の事業の完成を引き立てる役である。

E 瓜子姫が死亡するが復活するという型が本来のものだった。

F 瓜子姫は動物(鳥)の援助によって助けられるという型が本来のものであった。

後述になるが、藤井氏は瓜子姫が死亡する話が原型であると推測しているため、特に柳田説のEやFについては否定的なのである。

「柳田の時代にはまだ資料の収集が不十分であり、資料が収集・整理された現在から見れば物足りない側面も多い」

(二六頁)と評価している。

次に、関説を次のようにまとめている。  
(二八頁)

① 全国の「瓜子姫」の類話を収集・整理し、東日本に「死亡型」、西日本に「生存型」が多いということを確認した。

② 「瓜子姫」は通過儀礼としての「成女式」の要素が強いということを提唱した。

③ 「瓜子姫」の成立には海外の説話(評者注「偽の花嫁」)が大きく関わっているということ提唱した。

この関敬吾の研究に対しては、「瓜子姫」を海外との繋がりで見つけた最初の研究として評価しており、藤井氏自身も、基本的に海外由来の昔話として「瓜子姫」を考えている。ただし、関敬吾が「瓜子姫」を海外からの「帰化昔話」であると考察しているのに対して、藤井氏は、次の猪野説による「ハイヌヴェレ神話」起源を含め、様々な要素が日本へ伝播した結果成立したとして「混血の帰化昔話」と関の考察を補足して

いる。

そして、瓜子姫の起源を「ハイヌヴェレ神話」に求める猪野説を次のようにまとめている。(三二頁)

- ・現在の「瓜子姫」の分布はかつて焼畑農耕が盛んであった地域に重なる。
- ・「血の要素」に登場する作物はソバ・粟・黍など焼畑農耕によって栽培されるものである。また、染まる植物がスキヤカヤである類話も存在するが、それらは焼畑の休耕期に育つ植物である。

・姫の好物が芋類であり、老夫婦が家をあけるのは芋掘りに行くからという要素がある。また、九州には芋串によって姫が刺される要素も存在する。イモは焼畑農耕において重要な作物であり、稲作が広がる以前は日本列島の主食であった。

これら各説の一項目ごとに対して、藤井氏がその妥当性について丹念に検討している。そして、日本における瓜子姫の話の誕生については、『ハイヌヴェレ』神話を基

礎とし、『偽の花嫁』をはじめ多くの昔話の要素が結合し、誕生したものであると考えるのが最も妥当であると思われる(一五七頁)と結論づけている。発生について考えるのであれば、現状確認できる瓜子姫の資料と先行研究を鑑みて、的確な推論である。

さて、第一部においては、特に第二章が論の中心であり、目次からも分かるとおり、「瓜子姫」の構成要素一つひとつに対して分析を行っている。地域によって、それぞれの構成要素にどのような特徴があるかを整理している。そして国内伝承を整理した上で、国内での伝播の道筋を推測している。

話の分布状況から藤井氏が考える結論は、一七四頁に次のようにまとめられている。

- ・「瓜子姫」は海外説話の影響を受けて西日本で誕生した。

- ・おもに日本海ルートを通じて日本列島全域へ広まった。
- ・西日本では大陸などから渡ってきた別の説話と結びつくなどして徐々に変化していったが、比較的交通の便が悪い

東北や中国地方でも山間部では古い型が残された。

・東北でも日本海ルート of 重要な拠点であった秋田や山形北部には比較的西日本の影響の強いものに変化した。

また、従来は「東日本型」が瓜子姫が死亡する話が中心で、「西日本型」が瓜子姫生存型といわれてきた。しかし、「瓜子姫」の分布を細かく整理した結果、「東北地方」「中国地方を中心とした西日本」「中日本(中部および関東)」と分けるのが適当であることが判明した(一六三頁)。さらにここから次のように細かく分類している。

東北地方

東北A型(「鬼一口型」を基本とした「瓜子姫」)  
外敵への制裁はないか、描写があつさりしている。「ハイヌヴェレ」神話に近い型。

A型a: A型の中で、川を流れてきたものから姫が誕生する型(青森・岩手・宮城)

A型b: A型の中で、畑で採れたものから姫が誕生する型(山形南部・

福島)

東北B型：木への「連れだし型」を基本

とした「瓜子姫」。外敵への制

裁は比較的苛烈。中部以西の

「瓜子姫」と通じる要素を多く

持つ。(秋田・山形北部)

中国地方を中心とした西日本

西日本A型：「生存型」、木への「連れ出

し型」を基本とした「瓜子姫」。

外敵への制裁は苛烈。本来の

「死亡型」が様々な要因により

変化したと考えられるもの。(兵

庫北部・比婆山周辺・九州以外

の西日本。中国地方が中心)

西日本B型：「鬼一口型」「外敵への制

裁がない(姫の血で植物が染ま

る)」などの特徴を持つ「瓜子

姫」。「ハイスヴェレ型神話」に

比較的近い型。(比婆郡)

西日本C型：「鬼一口型」の「瓜子姫」。

B型に次いで「ハイスヴェレ型

神話」に近い。(兵庫北部)

西日本D型：「鬼一口型」がやや多い。

他の地域では見られない独特な  
型が多い。(九州)

中日本(中部および関東)

中日本A型：「死亡型」と「生存型」の

割合がほぼ拮抗。「鬼一口型」

と「連れ出し型」の両方の要素

を持つ「死体を木に吊す」とい

う型が多い。(新潟)

中日本B型：「生存型」が多い。「鬼一

口型」と「連れ出し型」両方の

要素を持つ「家の近所に姫を隠

す」要素が多い。(長野・関東)

地域によって様々な伝承を持つ「瓜子姫」

を丁寧に検証して、その伝承の全体像を把

握するのは、非常に労力を要する。その労

を惜しまず、細かい分布状況まで明らかに

したことによって得られた結論である。

ただ、紙幅の都合だろうか。分析をした

瓜子姫の構成要素表が載せられていなかっ

た。「津軽・南部・岩手・秋田・宮城・山

形北・山形南・福島・新潟」の地域に分け

て、地域別要素一覧表は載せられている。

この表に拠れば、津軽の七話、南部の一

話、岩手の五話、秋田の四九話、宮城の  
七話、山形北の一三話、山形南の三八話、  
福島の二二話、新潟の二七話に当たってい

る。そして、それぞれの地域において「姫

の誕生」「姫の受難」「姫の外敵」がどのよ

うな割合で語られているかの表はあるの

で、語られている内容のパーセンテージが

分かる。しかし、一話一話の構成要素は載

せられてない。つまり、前述の地域以外を

含めて分析をした総話数や一話一話の伝承

されている地域、それぞれの話の流れ、載

せられている書籍についてが、読み手に不

明である。基本的に『日本昔話通観』を手

掛かりに、その原典に当たる方法で話を収

集したことは文中からうかがえる。ただ、

『日本昔話通観』に載せられていない「瓜

子姫」の話もあるので、もし「通観」のみ

を手掛かりに話の収集をしていたとすれ

ば、それらの話は落ちてしまうことになる。

なによりも第一部の論を支えているのは、

藤井氏による丹念な「瓜子姫」の資料分析

である。これについて、読み手は全面的に

藤井氏の分析に依拠するしかない。根拠と

なる情報を共有できると、藤井氏の労力が更に説得力を持って読み手に届くことになり。構成要素表は膨大な情報量になるが、どこかで公開してもらえると、今後「瓜子姫」を研究しようとする後進にとつても貴重な情報となろう。

### 三

さて第二部は、「リライトされた『瓜子姫』」である。藤井氏が行った「瓜子姫の認知に関するアンケート」から始まり、御伽草子『瓜子姫物語』以降、近世期までに文献で残された「瓜子姫」と、児童書の「瓜子姫」へと分析が進んでいく。

第一部の口承文芸「瓜子姫」は、どうしても先行研究に対する検討、評価から論を組み立てざるを得ないが、第二部の藤井氏の論は、「瓜子姫」の体系的な再話研究に関する嚆矢となろう。特に圧巻は、第三章において藤井氏が確認した一六四冊の児童向けに書かれた「瓜子姫」の一覧表である。明治四〇（一九〇七）年から、平成二七

（二〇一七）年までの再話された「瓜子姫」を確認しており、これにより、第二部全体の論も自ずと説得力が増している。

まず、アンケートについては、立正大学・東洋大学・國學院大学の学生を中心に計二・四名の回答が得られている。やはり、「瓜子姫」の認知度は低く、よく知っているのは九名、なんとなく知っているのは二〇名、タイトルのみが四一名だった。また、多くの昔話を知っている学生ほど「瓜子姫」を知っている傾向が見られるという。「瓜子姫」の認知度が低いことは予想されたことだが、藤井氏の調査によって裏付けられたといえる。

その後、第二章において『瓜子姫物語』や近世期の『昔話きちちゃんんとん』『嬉遊笑覧』『心学道之話』の「瓜子姫」が分析され、「瓜子姫」が江戸とその周辺ではあまり知られておらず、その結果近代以降の「瓜子姫」に影響を与えなかったことが結論づけられる。そして第三章では、近代以降に書かれた児童向け「瓜子姫」には二系統があることが明らかにされた。藤井氏

は便宜的に「I型」と「II型」に分類して、次のようにまとめている。

「I型」：高野辰之・楠山正雄系統（高野の『瓜姫』が現在確認できる近代における最初の児童向け「瓜子姫」）

①あまのじゃくが姫に徐々に戸を開けさせる。

②怖い顔をしておどかして連れ出す。

③「汚れるから」と着物を交換。

④突然、殿様の迎えが来て「殿と奥方が機織りを見たい」と言う。

⑤姫が真相を告げる。

⑥あまのじゃくは切られ、作物が染まる。

このうち他ではほとんど見られない④を必ず有し、他の要素が複数以上あるものは楠山の影響を受けている「I型」と判断。

「II型」：関敬吾が取り入れ、坪田譲治・松谷みよ子と継承された秋田で語られる昔話の系統

秋田以外では見られない「あまのじゃくが姫を負ぶって連れて行く」展開を含み、

秋田ではほぼ必ず挿入される「カラスが真相を告げる」もの。

このように、児童向け「瓜子姫」に二系統あると分類できたのも、明治から平成までの児童書を分析した成果である。新しく昔話の児童書を作成する際に既刊本を参考にすることがよく分かり、それはこの「瓜子姫」の伝承が多様であるから、どの話を参考にしたかが一層浮き彫りになる。影響関係を探るのに「瓜子姫」は格好の昔話といえる。また、関敬吾など昔話研究者の児童書に対する影響力も提示してくれた。さらに「瓜子姫」や「瓜子姫子」などの題名が柳田以降「瓜子姫」へと収束していくという提示にも、研究者の影響力を見て取れる。

ちなみに、藤井氏は本書の終盤で次のような展望を述べている。

「昔話と童話のつながりを研究し、今後昔話をどのように再構成すべきか」(三九五頁)

「また、『瓜子姫』に限らず多くの昔話は『演じる』ものとも深い関わりがあると考える。具体例をあげると、紙芝居・舞台・

朗読劇・人形劇・アニメなどである。本来語りとして演じるものである昔話は、演じる再構成作品とは相性がいいものと考えられる。未来の昔話再構成作品を考えるにあたって、今後はこれらの媒体で再構成されたものの考察も試みることにしたい。」(四一七頁)

「もちろん、変更したものはあくまで入り口であり、そこから伝統的なものに興味を持つてもらおうところまで導くことが重要になると思われる。本来の魅力を保ちながら『瓜子姫』ひいては昔話を知ってもらい、興味を持ってもらうにはどのようにすべきか。今後は、研究のみにとどまらず、このような問題にも取り組んでいきたいと考えている。」(四二二頁)

こうした展望を読むにつけ、本書で述べられている関敬吾などの研究者が児童書に對して發揮した影響力が思い起こされる。果たして、明治から平成にかけての「瓜子姫」を研究した末に藤井氏がたどり着いた境地なのかはともかくとして、これも昔話研究と実践の形であろう。既に昔話の伝統

的な語りを聞くことができず、児童書や絵本から昔話に触れた筆者の問題意識が、現代のように様々なメディアの中で取り上げられる昔話の課題に向くのも自然なことに感じる。そこには、新しい昔話研究もあるであろうし、藤井氏の今後の活動の展開が楽しみである。

ともあれ、このように、第一部・第二部はともに、膨大な資料を収集した上での分析に基づいている。一つの昔話だけで、これだけ大部の研究書を書き上げられるというのは、取りも直さず昔話伝承の「豊かさ」も表している。ひとえに、藤井氏の労力と能力によるものであり、本書は、今後の「瓜子姫」研究において欠かすことができない研究書となっている。

二〇一八年九月 三弥井書店刊  
本体三五〇〇円  
(たていし・のぶあつ／高千穂大学)